

『海賊王は恋に跪く』

著:六堂葉月

ill:前田紅葉

驚いて飛び起きると、凱胤がベッドの傍らに立っていた。

「ただいま、美邦」

ランプの明かりに照らされた男前の顔が、ニコリとこちらに微笑んだ。

(いったいいつからいたんだ…っ!?)

ものすごく恥ずかしいところを見られたような気がして、真っ赤になった美邦は、力いっぱい羽根枕を投げつけて喚いた。

「貴様、いったい今までどこへ行っていったっ？ 待っていると私にウソまでついてっ！」

枕を難なく受けとめた凱胤は、クックククと意地悪く笑い、わざと美邦をからかってくる。

「待っている？ 俺は『先に行っている』と言っただけだぞ」

「な…なんだその言い種はっ！」

まるでこっちが勝手に待っていたと言わんばかりの、無反省な態度だ。

「お前など、どこでも好きなところへ行ってしまうばいいっ、もう知らんっ！」

悔しくて涙目になった美邦は今度は自分の枕を投げつけようとしたが、ベッドに腰掛けた凱胤に枕ごと抱き寄せられてしまった。

「冗談だ。寂しくさせて悪かった。できるだけ急いで帰ってくるつもりだったんだがな。

やっぱりこんな時間になってしまった。すまなかったな」

たくましい腕に抱かれていると、謝罪の口づけが下りてくる。

チュッと唇をついばむようなキスを美邦は受け入れた。しかし抵抗しなかったからといって、許したわけではない。

唇が離れると、腕の中から美邦は大きな瞳でジロリと凱胤を睨みつけた。

「こんな夜更けに、いったい何があって出かけていたんだ？」

「ちょっとしたヤボ用だ」

凱胤は美邦を放置して出かけていたことは詫(わ)びても、どこへ何をしに行っていたのかは話すつもりはないようだ。

セツの言ったように女の元へ行ったのか、本当に何か大事な用があったのか、美邦には判断できない。

凱胤は自分の話をあまり美邦にはしないが、こうして怒っているときには少しくらい説明をしてくれてもいいのではないかと思う。

狼狽(うろた)えて取り繕うような見苦しいことをしないのが、いつも飄々としている彼らしさでもあるが、愛情があるなら置いてきぼりにした言い訳の一つくらいしてほしい。

美邦を裏切った後ろめたさがないからかもしれない。だが、まるで開き直られているのかのようにも思える。

これではこちらの疑念は少しも晴れてくれないどころか、思考はどんどん怪しい方向へ向かっていってしまいそうになる。

(私に言えないようなことをしてきたって、思ってしまうじゃないかっ)

嫌な想像が頭の中を駆け巡り、美邦は口をへの字にしてふてくされた顔で嫌みいっぱいに問いかけた。

「…そうか。私と一緒にいるより優先される『ヤボ用』とは、いったいなんなんだ？ さぞや素晴らしいことなんだろう」

「そう怒るなって。かわいい顔が台なしだ」

「まさか、誰かとの密会に行ったんじゃないだろうな？」

「んー。まあ密会といえば密会だが……実際のところ、そんな色気のある相手じゃない。ただの頼まれ事だ」

「……私を放置していったお前の言うことなど、信じられないっ」

露骨に疑いの眼差しを向けると、さすがの凱胤も少しは反省して、美邦が納得するようなことを言ってくれるかと思ったが。

「そうか。なら、信じてくれなくてもいい」

少しも悪びれないその言葉に、一瞬目が点になった。

「もしや貴様っ、開き直るつもりかっ!？」

まさかそんな切り返しが来るとは思わず、美邦が大きく戦慄くと、凱胤と一緒に抱きしめていた枕を取り除き、美邦だけを包むようにしてそっと腕に力を込めてくる。

「いや、そうじゃなくて——たとえ信じてくれなくても俺がお前を愛しく想っている気持ちは変わらないってことだ」

強く抱き締められながらそう囁(ささや)かれると、恋する心はたちまち蕩(とろ)けそうになる。

「…っ」

(——なんて狡(ずる)い男だ)

開き直るかのようにこうも堂々と愛を伝えてくるのは、こちらの想いがわかっていてわざとやっているのだ。

凱胤は黒い瞳で優しく見つめ、美邦の恋心に直接訴えかけてくる。

「俺は、天下に名の轟く大悪党だ。だが、お前を裏切るようなことだけはしない」

「凱胤…」

宴のすっぽかしをうやむやにされていると承知していても、高鳴る胸の鼓動はどうしようもない。

女をたぶらかすのが得意だと聞いてしまった今は、なんだかせつかくの甘い言葉も適当にあしらっているだけではないかという疑念も湧く。

「本当だ。美邦」

だが、梳(す)くように優しく髪を撫でてくる掌が、いかに心地よいかを知ってしまったから始末が悪い。

恋の駆け引きにおいては、惚れた弱みほど圧倒的な敗北条件はないのだ。

美邦は唇を尖(とが)らせ、ふてくされたように凱胤を横目で見ると、

「神に誓えるか？」

「神なんて、そんなご都合主義の存在に俺は誓わない。俺は、この俺自身に誓う」

「……」

なんという不遜なセリフだろう。

でも、こんなところももちろん魅力で惚れてしまっている。

美邦が言葉を詰まらせると、クスクスと凱胤は笑い、大きな掌で美邦の滑らかな頬を撫でながら誘ってきた。

「俺は今から仮眠を取るが、お前は どうする？」

二人でベッドに入れば当然、ただ眠るというだけではすまない。

(この余裕っぷりは、やっぱり腹立たしい……っ)

「勝手に眠ればいいだろ。私は今起きたところだ」

美邦は腕の中から強引に抜け出そうとするが、難なく阻(はば)まれ引き戻された。

「そういつまでも拗(す)ねるな——愛してるよ、美邦」

長い睫(まつげ)が縁取る目元へのキス。そして何よりも甘い囁き。どちらも美邦がたまらないほど大好きなものだ。

「口説けば、私の機嫌が直ると思ってるんだらう？」

「だと嬉しいが？」

覗(のぞ)き込んでくる不敵な笑みを浮かべた男前の顔に見惚れる。

結局自分は囚われ人なのだ。澳門(マカオ)の海で出逢ってから。ずっと……。

本文 p35～40 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>